



1 ◆ 自分は一人

「人間と犬とはちがう。これは見ただけでわかる。だからお互いに犬の真似はしない。人間としての誇りを知らず識らず持っているからである。」

だが、見ただけでわからないのが人間同士である。なるほど顔もちがえば気性もちがう。これはだれでも知っている。だから人を見違えるようなことをだれもしない。それなのに、どうしてみんなあんなに、他人と同じようなことをやりたがるのだろうか。

自分は自分である。百億の人間が居っても、自分は自分である。そこに自分の誇りがあり、自信がある。そしてこんな人こそが、社会の繁栄のために本当に必要なのである。

自分を失った人間が百億居っても、それこそ馬合の衆にすぎない。自己を認識しないで、ただいたずらに他人の真似をしたがるのは、あたかも人間が犬の真似をするのと同じである。そこには何の誇りもない。お互いに、自分が他人とちがう点を、もっとよく考えてみよう。そして、人真似をしないで、自分の道を自分の力で歩んでいこう。そこにお互いの幸福と繁栄の道がある」

松下幸之助さんの「自分は自分」という文章です。会社に入ると、社風にとけこむとか、会社の方針に従うといったことが、とかく強調されます。もちろん、それはある面で必要なことですし、松下さん自身、人一倍そういうことを大事にした経営者だったといえます。

しかし、その前提として、まず一人ひとりの個人が、自分をしっかり持つということか、自分をほんとうの意味で大切にしなくてはならない、そう松下さんは説いています。この世界に何十億という人がいても、自分という人間は一人しかない、かけがえのない存在なのです。

「そんなことは今さら言われなくても、わかっている」と思うかもしれません。たしかに、そうでしょう。わかり切った、当たり前のことです。しかし、この「自分は一人」ということ

を、ほんとうに自分の生き方の基本にすえ、日々それに即した生活をしているかとなると、はたしてどうでしょうか。他人の言動、周囲のムード、社会の流行や世論などに知らず識らずに影響され、流されて、自分を見失いがちなのが私たちの姿ではないでしょうか。特に最近のように各面の変化が激しく、多種多様な情報があふれていると、その恐れは大きいと思います。

そして、フト気がつくくと、何か満たされない思いが心の中にたまっていたり、こんな日々でいいのかという不安や焦りが起きてきたりします。それはその人自身にとっても幸せとはいえません。それが仕事にかかわってのことであれば、会社や社会にとってもマイナスです。

一時期、『徳川家康』（山岡荘八著）が経営者の間でたいへん読まれたことがありました。その時松下さんは、ある友人の経営者に「みんな持ち味がちがうのだから、それが家康のように行動したら、たいへんな失敗になる。だから、あの本を面白く読むのならいいけれども、それをそのまま手本にしようという読み方は、私はいかんと思う」と言っています。

また、松下さんが、政治家はじめ指導者を育てる場として、松下政経塾を創設した時のことです。非常な社会的反響を呼び、各方面から「どうい教育をするのか」という質問が寄せられました。その時松下さんは次のような意味の答えをしています。

「人間は一人ひとり皆ちがう。千差万別という言葉があるが、実際はもつと多様で『万差億別』と言ってもいい。だから松下政経塾では、画一的な教育はやらない。塾生それぞれが自分の志や個性に即した計画をたて、自学自習、自修自得の研修をすすめていくのだ」

そのような研修は、塾生にとって、与えられたカリキュラムをこなすより、一見自由で楽なようですが、常に自分と向きあっているというのは、実際には、かえって苦しい面があります。しかし、その苦しみの中から、少しずつ人が育っていくのです。

会社生活でも、自分をしっかり保とうとするより、なんとなく周囲に合わせているほうが楽かもしれません。が、そこに自分のほんとうの幸せがあるでしょうか。